

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

5月5日、近鉄橿原線の笠縫駅を降りて、西に歩く。駅前を抜けると日差しは強く、周囲は田や畑が続く。ビニールハウスで働く人や、一家総出で苗代作りをしている人々のそばを通って、飛鳥川を越えると矢部の集落に着く。杵都岐神社の鳥居下には10メートルほどの綱が既に出来上がっている。綱の一方の端にはセンダンの枝が挿してある。

矢部の集落は93戸。10の隣組に分けて、世話役のトヤ(当屋)を決めて、組単位での綱掛け行事が毎年行われる。今年は7組が担当で、前日4日に綱や木製の鋤と鍬の模型や牛の姿を木版で刷った

紙片などを用意したという。午前10時ごろから、神社の向かいの新しい公民館でにぎやかな会食が始まる。神社の広場には、法被姿の子供たちも次第に集まってきた。

11時前から、子供と大人が綱を担いで、集落を回り始める。録音テープで伊勢首頭をかけ、この一年に嫁を迎えた人などを綱で巻き、道々周囲にお酒を振る舞いながら、わいわいと練り歩く。11時半ごろ、集落の南の端に到着。ここはヨノミ(榎)とニレの木に綱を



綱掛けを終えて、記念撮影する今年の参加者

いけないという綱掛けは、ちょうど正午ごろに終了した。この場所には白いへびがいるといわれたり、木を切るとたたりがあるともしう。橿原市などでは藁製のジャ(蛇)を担ぎ回る野神行事があるが、ここでは綱が福的な存在として人々を祝福して回り、集落の南の入り口、小字「ツナカケ」の場所に張り渡して、土地の安全を守る。同時に苗束や農具の模型と、耕作に必要な牛の刷り物を供えるところなどは農耕の無事の

祈る野神行事そのものを祈る野神行事そのものと言える。ところが、野神の観念そのものは今は伝えられていない。不思議に思っ

て、県立橿原考古学研究所が編さんした『大和国条理復元図』で矢部の小字名を見てみると、集落の東北に「神の木」という字名が残っている。野神は、「一本木」「神の木」とも表記されることがある。

ここで行われていた野神行事がいつの頃からか「ツナカケ」の地で併せて行われるようになったのだろうか。

(奈良民俗文化研究所代表)

野神と綱掛けの習合

張り渡す。竹籠に入れたみずみずしい苗の束や馬鍬や唐鋤の農具の模型も午前中に終わらなければ